教科教育キャリアアップフィールド（音楽）
音楽教育コースの全体的な展開状況

音楽教育専修　　朝　田　　健

昨年，一昨年と二年にわたり，音楽教育専修は，12年目研修を七人の教員で担当した。以下の表に示すとおり10のコースを開講し，研修生の対応にあたった。その内容は，12年目岐阜大学研修の以下に示す方針に基づいて設定している。

一つは，これまでの実践を振り返って，自分の授業観や子ども観や教材観を問い直し，今後の実践を展開する手がかりをつかむことを支援する。二つには，対応の仕方や展望や解決の方向をつかめずにいる問題などの解決に資する知識を得たり，取り組む姿勢の形成を支援する。三つ目には，今後の実践の基盤となる専門的知識の向上とその実践の場での活用方法などを支援する。これらをふまえた上で研修教員本人の主体的な資料調査，大学教員との対話や議論を重視して研究が進められていく。

音楽科の場合，専門的知識の向上すなわち，声楽や器楽，ピアノといった実技関係の研修とその指導方法を行うコースと日本音楽，創作の課題と指導方法の研修などに分かれる。また個人の研究研修にとどまらず，研修教員同士の議論の場も設定し，お互いの研修を高めるようにしたコースもあった。研修の特徴である，大学院レベルの研究的研修であることと，少人数ゼミ形式による発表と研究活動と討論をふまえた研修である。

日程は７月の終わりから８月の終わりにかけて，各指導教員の予定に基づき，５日間にわたる研修を設定した。第一日は研修教員の紹介，オリエンテーション，第二日から第五日までの日程決定，研修教員が構想してきた大学研修課題に基づき問題意識や研修内容に関する資料提供またそれらに基づいた参加教員の討論，大学教員のアドヴァイス，資料提供などお行われた。それぞれのコースで設定された第五日には，一ヶ月間に及ぶ研修の成果を発表しあい，意見交換を行った。たとえば，「教材研究と授業改善」のコースでは，まず参加教員五人の一ヶ月の研究成果を発表しあった。それぞれの教員は第一日に発表した課題意識にのって，大学教員や他の参加者のアドヴァイスを元に実践的な研究を重ね，第二学期に実践可能な提案をしたり，自らの力で，教材を掘り下げる成果を出した研修生もいた。

平成15年度は11月に研修者の成果を発表する機会が設けられ，全員ではないが各部門に分かれて研修発表が行われた。その発表や参加者の討議の中で，夏休みの研修成果を二学期の授業に生かし，実践を行った報告や，課題意識の問題を解決し，授業方法の改善などを行い，授業者と受講者の壁を大きく取り払うという成果を出した研修者もいた。その分科会では，参加者から研修者の大きな変貌ぶりに感嘆の声も聞かれるほどであった。

平成15年度音楽教育専修が開設したキャリアアップフィールドのコース一覧

	コース名	研修内容	担当教員	予定定員
1401	日本音楽研究	音楽教育における「日本音楽」の考え方と指導法研究	久野壽彦	9
1402	歌唱表現Ⅰ	歌唱における発声および表現	八神利夫	9
1403	歌唱表現Ⅱ	美しいハーモニーをつくるための声（ヒビキ）の出し方について ～母音，子音の特性を認識することから～	植松　峻	5
1404	合唱指揮法	ダイナミックな合唱をするための合唱指揮（指導）の方法について	植松　峻	4
1405	器楽指導	器楽指導の課題	朝田　健	5
1406	ソルフェージュ	ソルフェージュ，そして聴くことの意味 ～ピアノを使って～	讃岐京子	9
1407	教材研究と授業改善	教材研究と授業改善	朝田　健	4
1408	創作表現Ⅰ	創作授業の問題点と評価	佐原秀一	9
1409	創作表現Ⅱ	創作表現を中心とした教材開発と音楽科カリキュラムへの位置づけ	松永洋介	5
1410	音楽科授業分析	音楽科における授業分析を通した子どもの思想・表現過程の解析と教授行為の有効性の検討	松永洋介	4

学校現場で行われている様々な形の研究発表ではなく，自らが課題を持って望み，その課題に対して，大学教員や，同じ年数の教員生活を持つ研修教員のアドヴァイスを元に，まず一ヶ月間にわたり，その課題に取り組むということは，まさに，岐阜大学の研修の支援の三つの柱が生かされたといえる。そしてその研修成果を九月以降の学校生活に生かし，教員として実績を重ねていくきっかけになったといえるのではないか。とくに「これまでの実践を振り返り，自分の授業観や子供観や教材観を問い直し，今後の実践を展開する手がかりをつかむことを支援する」を指導教員として実感できたことは，この岐阜大学研修の意義を十分に感じることができた。

平成16年度においては，この二日間にわたって行われた全体発表の場がなくなり，教育委員会と大学教員の研修報告書を元にした12年目研修大学研修の協議会になった。研修教員の研修結果に基づく，実践の報告が聞けなくなったことは残念に思われる。

岐阜大学研修の特徴の一つにＡＩＭＳを利用した遠隔研修，遠隔指導があげられる。音楽教育講座においても，理論系の領域においてはメールやファイル転送による指導は可能である。しかし，声楽や器楽などの実技研修においては，たとえ期間が短くとも対面指導のレッスンという形をとらざるを得ない。このような指導方法，指導内容と指導教員の負担の問題や，研修生の所属している送り出し機関の問題，研修生の通学の問題なども含めて，ＡＩＭＳ利用の指導についての長所・短所の洗い出しが今後の課題となるであろう。

また，音楽教科が専門でない先生で，小学校において熱心に音楽を教えることに課題を持ち，この大学研修に参加された先生にとっては，５日間の大学研修で，自らの課題に対して多くの成果は得られたであろう。しかし，明確な専門知識を得ることや，その指導法などの研究が満足できるところまで，研修できるかという点については，時間が足らない点からも大きく首を縦に振ることはできない。研修以後の大学と研修教員とのつながり，指導教員と研修教員とのつながりを密にしていかなければならないであろう。

この二年，二回の大学研修に対する音楽教育専修の教員の意欲は大変高く，指導においてかな

り充実したものを感じた。一方研修生は，大学の研修が始まったばかりであり不安を感じてはいるものの，成果に対する強い期待を寄せており，その期待が指導教員とのやりとりの中にもみられ充実感を味わえる研修であった。一昨年行われた，合同の研修発表の折りには，研修生の発表や，研修以後の教員生活の充実ぶりからも感じることができた。

今年三年目をむかえるにあたり，研修内容の充実をはかるとともに，この研修を機会に，岐阜大学音楽教育専修（講座）と岐阜県の学校，先生との連携を深め，岐阜県の音楽教育の充実，発展を進めていくよう，12年目研修岐阜大学研修の充実を図っていきたい。